

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 平 健介

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

寄生虫感染症は、産業動物獣医療および伴侶動物獣医療のいずれにおいても発生頻度が高く、臨床上の重要性が極めて高い疾患群である。このため、獣医寄生虫学関連科目における教育活動は、獣医学教育の中核をなす重要な領域である。とりわけ獣医学科学生は、臨床現場で遭遇頻度の高い寄生虫病について、診断・治療・予防に関する体系的かつ実践的な知識と技術を、卒業時まで確実に修得しなければならない。これらを効率的かつ確実に修得させる教育を実践することは、獣医寄生虫学教育者に課せられた責務であると考えらる。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医寄生虫学Ⅰ（獣医寄生虫病学を含む）	獣医学科	必修	3	140
獣医寄生虫学Ⅱ（獣医寄生虫病学を含む）	獣医学科	必修	2	140
獣医寄生虫学実習	獣医学科	必修	3	140
獣医学概論	獣医学科	必修	1	140
総合獣医学	獣医学科	必修	6	140
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	3
卒業論文	獣医学科	必修	6	11
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	11
動物人間共生論	動物応用科学科	選択	2	50
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	0
牧場実習	動物応用科学科	選択	2	50
動物応用医科学特論Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	1
動物科学特論Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	1
動物科学特論Ⅱ	獣医学専攻	選択	1	1
動物応用医科学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	0
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	1
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	1
動物感染症Ⅱ（免疫学、寄生虫学、ウイルス学（総論））	獣医保健看護学科	必修	2	80
動物臨床検査学	獣医保健看護学科	必修	2	80
寄生虫学特論	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別演習Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別実験Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別演習Ⅱ	獣医学専攻	選択	2	0
寄生虫学特別実験Ⅱ	獣医学専攻	選択	2	0
寄生虫学特別演習Ⅲ	獣医学専攻	選択	3	0
寄生虫学特別実験Ⅲ	獣医学専攻	選択	3	0
寄生虫学特別実験Ⅳ	獣医学専攻	選択	4	0
動物科学特論Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0
動物応用医科学特別演習Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択	2	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

教育理念は、寄生虫病の診断・治療・予防に関する確かな知識と技術を備え、卒業後に産業動物あるいは伴侶動物臨床の現場で主体的に判断し行動できる獣医師を育成することである。寄生虫病への適切な対応は、畜産業の発展や食の安全・安心の確保、さらには伴侶動物を通じた人の心の安定にも直結し、その社会的意義は大きい。一方で、教科書に記載された知識や診断技術は決して固定的なものではなく、重要性も時代とともに変化する。したがって、従来の知識伝達にとどまらず、新しい知見や未知の課題に対応できる思考力と応用力の涵養を重視する。そのため、自らも常に臨床現場の動向や国際的な研究成果を把握し、教育内容を更新し続けることを心掛ける。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

理念である「変化に対応できる獣医師の育成」を実現するために、教育内容を常に現場と接続させることを基本方針としている。寄生虫病は地域性や飼養形態、流通形態の変化により発生状況が変動するため、教科書の知識のみでは十分とはいえない。そこで、国内各地から寄せられる検体を検査し、実際に寄生虫を観察・同定することで、現在進行形の発生状況を把握するよう努めている。その成果や経験を講義や実習に還元し、学生が「今、起きている問題」として学べるよう工夫することを心掛けている。また、臨床獣医師とのネットワーク拡充に努め、現場での課題や疑問を共有し、教育内容に反映させている。学生には症例を基に考察させ、診断根拠を言語化させることで、知識の暗記ではなく臨床推論力の養成も重視している。

一方、国際的な研究動向については、学術論文の継続的な講読や国内外の学会参加を通じて最新知見を収集している。新しい情報は講義資料へ随時反映させるとともに、学生にも原著論文を紹介し、科学的根拠に基づいて考える姿勢を養うことを目標とする。こうした実践的かつ更新型の教育を通じて、卒業後も自ら学び続けられる獣医師の育成を目指す。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

寄生虫学教育では、実物から学ぶアクティブラーニングを重視している。可能な限り獣医療現場から生きた寄生虫を確保し、実習では学生自身が検体処理・検出・観察を行う。さらに、重要所見や鑑別点を問いかけ、学生同士で考察させることで、形態学的知識を臨床判断へ結び付ける主体的学修を促している。

(2) ICTの教育活用

有

講義資料には静止画に加えて動画をなるべく多く利用することを心掛け、寄生虫の形態や運動性を動的に提示している。また、担当講義は録画しオンデマンド配信することで、学生が理解度に応じて繰り返し視聴できる環境を整え、自律的学修を支援している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

講義や実習では、学生が学習内容を自らの言葉で説明する時間を意図的に設けている。理解したつもり知識も、他者に説明しようとする曖昧さが明確になるためである。学生同士で説明・質疑応答を行わせることで、知識の定着を図るとともに、論理的思考力および臨床現場で求められる説明能力の涵養を目指している。

(2) 学生の理解度の把握

A

講義では毎回小テストを実施し、その回の到達度を確認している。結果を踏まえて次回講義の説明を補強し、理解が不十分な項目は再度解説することで、知識の定着を図っている。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

講義開始時に、小テストで良い成績を得るためには事前の自学自習が不可欠であることを明確に伝えている。また、講義では到達目標を具体的に示し、学習の方向性を明らかにして継続的な予習・復習を促している。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

実習では疑問点があればその場で積極的に教員へ話しかけるよう促している。講義においても、休み時間等に質問を歓迎する旨を伝え、対話しやすい雰囲気づくりを心がけている。

(5) 双方向授業への工夫

A

双方向性を高めるため、講義中のみならず、質問や意見をメール等で随時受け付けている。対面で発言しにくい学生にも発言機会を確保し、多様な意見を授業改善や内容補足に反映させるよう努めている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

B

国家試験対策として、出題傾向を整理し、重要分野を講義内で説明している。また、国家試験の過去問題を紹介し、解答の根拠を解説することで、知識の確認と応用力の向上を図っている。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

アンケート結果を踏まえ説明や資料を改善し、学生の要望も可能な限り反映させることに努めている。実現困難な事項は理由を示し、継続的な見直しに努めている。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

概して授業理解度や満足度は向上したと考えられるが、翌年度にも同様の要望が寄せられることがあり、改善内容の定着や周知方法など、課題は残る。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

改善点をより明確に学生へ説明し、変更内容とその意図を共有する。また、年度途中にも意見を把握し、迅速に反映できる体制を整えたい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

学生の成績向上には学習意欲の喚起が重要である。獣医療現場由来の生身の寄生虫検体を実習に活用し、学生自身が検出・観察する体験を通じて、理解への意欲と深化図っている。

(2) (1)の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

実習への主体的参加が増え、理解度の向上や成績の安定がみられ傾向がある。学生からは「実物観察で理解が深まった」との声があり、臨床現場からも基礎的診断力が身につけているとの評価を得ている。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

各種FD研修に参加し、得られた知見のうち有用と考えられる内容を授業や実習に随時取り入れている。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

【短期目標】 国家試験における寄生虫学関連問題への確実な対応力を養うことを目標とし、出題傾向の分析と講義内容の充実を図り、基礎知識の定着と応用力の向上に努める。

【長期目標】 臨床現場で自立して寄生虫病に対応できる獣医師を育成し、卒業後も新たな知見に対応し続けられる主体的学修力を備えた人材の輩出を目指す。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

- ・ 獣医寄生虫学関連シラバス
- ・ 講義スライド資料
- ・ 講義録画（オンデマンド配信資料）
- ・ 小テスト問題例
など